

建設業における“環境”の役割

株式会社 熊谷組
技術本部新技術創造センター技術部長 門倉 伸行



この5月にCNC Pのサポーターとして参加させていただきました、熊谷組の門倉と申します。CNC Pの中では、「うなぎ完全養殖インフラ整備事業研究会」に所属させていただいております。

サポーター登録をしてまだ2ヵ月ですが、これからいろいろ情報交換していくためにもこれまで主として関わってきた「ビオトープ」に関して事項紹介をさせていただきます。熊谷組では、入社から一貫して「環境」をテーマとして仕事してまいりました。実は、私の出身が当時の建設会社としては珍しく「化学」ということで、廃水処理や種々の材料分析等の業務から始まり、少しずつ環境の専門家になっていったという感じです。

一口に「環境」と申しまして、非常に間口が広い分野ですが、社内で担当してきた分野は、生物多様性等のビオトープ、豊洲で一躍有名になった地下水・土壌汚染問題の他、現在は筑波大学とともに微細藻類を用いたバイオマスのプロジェクトにも参加しています。

このうち、とくにビオトープに関しては、他社との差別化を図るため、弊社の協力業者から「ホテル」の専門家をご紹介いただいたのがご縁で、それ以来ホテルの棲める環境づくり(われわれは「ホテルビオトープ」と称しています)に執着して進めてきました。これまでに、大小合わせて17件ほどの実施例がございます。その中でも、比較的大規模なビオトープの例を示します。これは、大分県日田市で施工した「大山ダム」での実施例です。

ビオトープに関しましては、弊社も含めどちらかというと作りっぱなしで、担当した各自の自己満足のことが多かったため、生物多様性の保全に対して定量的かつ公平に評価する制度を探した結果、「公益財団法人 日本生態系協会」という機関で生物多様性の保全や回復に資する取り組みを定量的に評価する手法「JHEP (ハビタット評価認証制度)」を運営していることを知りました。そこで、弊社のホテルビオトープに関して、JHEPの認証を取得すべく相談した結果、ホテルの生息に関するデータを協会として保有していないとのことで、ホテルの幼虫や幼虫が餌とする「カワニナ」という巻貝の生息空間の必要条件等を共同研究で調査・研究することから始めました。データ取得後に、前述の大分県日田市の大山ダムでのホテルビオトープに対し早速JHEPの認証を申請して、湿地環境では日本で初めての認証を取得することができました。当初、このJHEP認証は弊社単独で取得しましたが、取得後に発注者の独立行政法人水資源機構とも協議して、将来のビオトープの管理者は水資源機構であるので、共同認証者として支援をお願いすることにしました。ある意味、ダムは生態系を破壊する悪者のように扱われることが多いのですが、水資源機構として実際にはかなり生物多様性を意識した施工を実施してきていますので、その一環として生物多様性を前面に押し出す良い機会になったでしょうから、win-winの成果だと思っています。



大山ダムホテルビオトープ全景



ホテルビオトープでのホテルの飛翔

今回の「うなぎ研究会」では、前述の「藻類バイオマス」プロジェクトに関連して、魚類の飼料として最近「藻」が活用されている例を聞き及び、応用例として、うなぎの稚魚の「しらすうなぎ」の飼料として、「藻」が活用できないかなどと、勝手に想像しているところです。

